

第7章 児童・生徒のクラスでの生活に関する調査結果

本章では、児童・生徒のクラスでの生活に関する意識調査として行った学級の雰囲気、学級内での児童・生徒の意識・態度、教師の児童・生徒理解、適正な「生活集団」の規模、「学習集団」と「生活集団」の分離に対する意見の5項目についての調査結果を報告する。

なお、分析にあたっての学級規模の区分は、学級規模1（20人以下）、学級規模2（21～25人）、学級規模3（26～30人）、学級規模4（31～35人）、学級規模5（36人以上）の5区分とした。

7 - 1 学級の雰囲気

児童・生徒が学級の雰囲気について、どのような印象をもっているかをSD法(Semantic Differential Method)によって捉えた。『あなたは、自分のクラスについてどんな感じをもっていますか。それぞれの項目について、「よく感じている、少し感じている、同じくらい感じている、少し感じている、よく感じている」の中から一つだけ選んで、当てはまるところに をつけてください。』の指示により、20の対となる項目(形容詞/形容動詞)を用意し、5選択肢で評定を求めた(分析に用いたのは、表7 - 1 - 1、表7 - 1 - 2に示した17項目である)。

選択肢の「よく感じている」に1ないし5、「少し感じている」に2ないし4、「同じくらい感じている」に3の数値を与え、学級規模別の学級の平均値を算出し、その結果を表7 - 1 - 1(小学生)、表7 - 1 - 2(中学生)に示した(従って、平均値の値が小さい程、表の左の項目に、大きい程、右の項目に近い評定をしていることになる)。表中には、五つの学級規模のすべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値の差の検定結果も示してある。

7 - 1 - 1 小学生の結果と考察

分析に用いた17項目のうち9項目((1)おとなしい(2)生き生きした(4)やさしい(10)静かな(11)つまらない(12)にぎやかな(14)らんぼうな(18)きらい(20)大きい)では、いずれの学級規模間の平均値に、統計的な有意差は認められなかった。これらの9項目それぞれの全体の平均値から、いずれの学級規模の児童も、自分の学級について、「(1)かっぱつな」「(2)生き生きした」「(10)うるさい」「(11)楽しい」「(12)にぎやかな」と感じている方向に評定し(全体の平均値が2.00以下あるいは4.00以上の項目)、小学生の学級が活動的であることを示している。

その他の8項目(3、7、8、9、15、16、17、19)においては、五つの学級規模のすべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値に関して、いずれかの学級規模間で、有意差が認められ、その特徴的な傾向をあげると以下ようになる。

「(15)すいている」、「(17)広い」の2項目では、小規模学級(学級規模1)の児童ほど、相対的に「すいている」、「広い」の方向に、大規模学級(学級規模5)の児童ほど、相対的に、「こんでいる」、「せまい」の方向に評定している傾向がみられている。

「(8)はりつめた」、「(16)親しみやすい」、「(7)のびのびした」の3項目では、学級規模1の

児童は、学級規模（２，３，４，５）の児童より、相対的に、「（８）のんびりした」「（１６）親しみやすい」「（７）のびのびした」の方向に評定しており、これらの３項目については、概ね学級児童数20人を境にして、感じ方がやや異なっていることを示唆している。

学級規模４の児童が、他の四つの学級規模（１，２，３，５）の児童と比較し、相対的に「（１９）古い」の方向に評定している。

7 - 1 - 2 中学生の結果と考察

分析に用いた17項目のうち５項目（（１）おとなしい（２）生き生きした（１２）にぎやかな（１９）古い（２０）大きい）では、いずれの学級規模間の平均値に、統計的な有意差は認められなかった。いずれの学級規模の生徒も、自分の学級について、「（２）かっぱつな」「（１２）にぎやかな」の方向に評定している（全体の平均値が2.00以下あるいは4.00以上の項目）。しかし、小学生ほどの活動性はみられない。

その他の12項目においては、五つの学級規模のすべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値に関して、いずれかの学級規模規模間で有意差が認められた。小学生と比較して、学級規模間の平均値に有意差の認められた項目は多くなっている。

平均値の差の検定結果から、特徴的な傾向をあげると以下ようになる。

「（１５）すいている」「（１７）広い」の２項目では、小学生の結果とほぼ同様の傾向を示しており、小規模学級(学級規模１)の生徒ほど、相対的に、より「すいている」「広い」と評定し、大規模学級(学級規模５)の生徒ほど、相対的に、より「こんでいる」「せまい」の方向に評定している。

「（１６）親しみやすい」についても、小規模学級の生徒ほど「親しみやすい」の方向に評定している。

学級規模１の生徒は、他の四つの学級規模（２，３，４，５）の生徒より、相対的に、より「（１１）楽しい」、また他の三つの学級規模（３，４，５）の生徒より、相対的に、より「（１４）ていねい」の方向に評定している傾向にある。

学級規模１と学級規模２の生徒は、他の三つの学級規模(３，４，５)の生徒より、相対的に、より「（３）まじめ」「（７）のびのびした」「（９）あたたかい」「（１８）すきな」の方向に評定している。

概して言えば、各項目での平均値に有意差が認められるのは、学級規模１，２の間では少なく、これらの二つの学級規模とその他の三つ学級規模（３，４，５）との間に多くみられる傾向にある。このことは、学級生徒数が25人を境にして、生徒の学級の雰囲気を感じ方がやや異なっていることを示している。

表7-1-1 学級の雰囲気（小学生）

項 目 \ 学級規模	1	2	3	4	5	全体	項 目	平均値の差 の検定*
(1) おとなしい	4.15	4.19	4.15	4.14	4.21	4.17	かっぱつな	ns
(2) 生き生きした	1.78	1.78	1.81	1.81	1.76	1.79	しずんだ	ns
(3) まじめな	3.09	2.99	3.03	3.06	3.19	3.07	ふまじめな	5>2
(4) やさしい	2.55	2.64	2.66	2.68	2.61	2.62	こわい	ns
(7) のびのびした	2.06	2.19	2.20	2.25	2.32	2.19	こせこせした	(5・4)>1
(8) はりつめた	3.78	3.56	3.59	3.57	3.61	3.63	のんびりした	1>(2・3・4・5)
(9) つめたい	3.83	3.76	3.75	3.61	3.71	3.74	あたたかい	1>4
(10) 静かな	4.05	4.06	4.18	4.16	4.22	4.12	うるさい	ns
(11) つまらない	4.24	4.16	4.19	4.14	4.15	4.18	楽しい	ns
(12) にぎやかな	1.62	1.62	1.63	1.64	1.63	1.63	おちついた	ns
(14) らんぼうな	2.84	2.87	2.80	2.73	2.77	2.81	ていねいな	ns
(15) すいている	1.92	2.51	2.85	3.26	3.65	2.73	こんでいる	5>4>3>2>1
(16) 親しみやすい	1.90	2.08	2.07	2.16	2.14	2.06	親しみにくい	(2・3・4・5)>1
(17) 広い	2.03	2.43	2.65	2.99	3.24	2.59	せまい	5>4>3>2>1
(18) きらい	3.83	3.72	3.73	3.66	3.66	3.73	すきな	ns
(19) 古い	3.06	3.03	3.09	2.72	2.92	2.98	新しい	(1・2・3・5)>4
(20) 大きい	2.86	2.80	2.83	2.98	2.85	2.86	小さい	ns
学級数	71	66	54	50	58	299		

* 五つの学級規模すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値の差を検討した。

nsは、すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す ($p>0.05$)。

その他は、いくつかの二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差のあったことを示す ($p<0.05$)。例 5>2 (5・4) (2・3・4・5) 等は、それらの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す ($p>0.05$)。

平均値は、数値が小さいほど左の項目、大きいほど右の項目に近い評価をしていることを示す。

表7-1-2 学級の雰囲気（中学生）

項 目 \ 学級規模	1	2	3	4	5	全体	項 目	平均値の差 の検定*
(1) おとなしい	3.94	4.00	4.05	4.01	4.09	4.02	かっぱつな	ns
(2) 生き生きした	2.02	1.98	2.10	2.06	1.99	2.03	しずんだ	ns
(3) まじめな	2.99	3.05	3.21	3.18	3.25	3.12	ふまじめな	(3・4・5)>1 (3・5)>2
(4) やさしい	2.32	2.46	2.65	2.51	2.58	2.49	こわい	3>2>1 3>4 (4・5)>1
(7) のびのびした	2.07	2.12	2.32	2.23	2.21	2.18	こせこせした	(3・4・5)>1 3>(1・2)
(8) はりつめた	3.93	3.79	3.68	3.70	3.71	3.77	のんびりした	1>2>3 1>(4・5)
(9) つめたい	3.79	3.76	3.53	3.64	3.62	3.68	あたたかい	1>(3・4・5) 2>3
(10) 静かな	3.84	4.03	4.03	4.01	4.09	3.99	うるさい	5>1
(11) つまらない	4.08	3.93	3.82	3.90	3.85	3.92	楽しい	1>(2・3・4・5)
(12) にぎやかな	1.98	1.91	1.92	1.88	1.86	1.91	おちついた	ns
(14) らんぼうな	2.96	2.86	2.73	2.77	2.80	2.83	ていねいな	1>(3・4・5)
(15) すいている	1.88	2.45	2.94	3.15	3.38	2.70	こんでいる	5>4>3>2>1
(16) 親しみやすい	1.92	2.12	2.39	2.38	2.41	2.22	親しみにくい	(3・4・5)>2>1
(17) 広い	2.20	2.66	2.93	2.99	3.16	2.75	せまい	5>(3・4)>2>1
(18) きらい	3.80	3.69	3.46	3.56	3.52	3.62	すきな	1>(3・4・5) 2>(3・5)
(19) 古い	2.98	2.92	2.85	2.97	2.84	2.91	新しい	ns
(20) 大きい	3.10	3.07	3.01	2.95	3.02	3.04	小さい	ns
学級数	71	66	54	50	58	299		

* 五つの学級規模すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値の差を検討した。

nsは、すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す ($p>0.05$)。

その他は、いくつかの二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差のあったことを示す ($p<0.05$)。例 5>2 (5・4) (2・3・4・5) 等は、それらの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す ($p>0.05$)。

平均値は、数値が小さいほど左の項目、大きいほど右の項目に近い評価をしていることを示す。

7 - 2 学級内での児童・生徒の意識・態度

学級内での児童・生徒の意識・態度について、『日ごろ、あなたが自分のクラスの中で感じたり思っていることなど、次のようなことがどのくらいありますか。それぞれ、「よくある、時々ある、あまりない、全くない」の中から一つだけ選んで、あてはまるところに をつけてください。』という指示により、表7 - 2 - 1 , 表7 - 2 - 2 に示した11項目について評定を求めた。選択肢「よくある」に1、「時々ある」に2、「あまりない」に3、「全くない」に4の数値を与え、学級規模別の学級の平均値を算出し、その結果を表7 - 2 - 1 (小学生), 表7 - 2 - 2 (中学生) に示した(従って、平均値の値が小さい程、表の項目に同意(よくある) 大きい程、反意(全くない) の方向に評定をしていることになる)。表中には、五つの学級規模のすべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値の差の検定結果も示してある。

7 - 2 - 1 小学生の結果と考察

分析に用いた11項目のうち2項目((3)友だちがまちがえた時、笑ったり、ひやかしたりすること、(4)友だちが困っているとき、誰かが助けになってあげること)では、いずれの学級規模間の平均値に、統計的な有意差は認められなかった。全体の平均値から項目(3)については「あまりない」、項目(4)については、「時々ある」に近い評定しているという結果である。

その他の項目については、以下に述べるように学級規模間の平均値に統計的な有意差が認められるものの、全体的な傾向としては、項目「(5)自分はのけ者にされていると感じること」と「(11)クラスを変わりたいと思うこと」の2項目については、「あまりない」に近い評定をし、「(9)授業や話し合いなどが始まるまでに時間がかかりすぎると感じる」と「(10)授業や話し合いの時、さわりだり、立ち歩く友だちがいること」の2項目では、「時々ある」にやや近い評定をしている。その他の5項目については、評定値の中間値(2.50)と「あまりない」の範囲で、小学生の学級内での意識・態度として概ね良好な状態がみられる。

なお、学級規模間の平均値の差の検定結果から、特徴的な傾向をあげると以下ようになる。

「(1)答えがわからなくて恥ずかしい思いをすること」「(6)クラスの友だちは、成績やテストのことばかり気にすると感じること」「(8)友だちどうしの争いやいじめをみること」「(11)クラスを変わりたいと思うこと」の4項目について、学級規模1の児童が、他の四つの学級規模(2, 3, 4, 5)の児童より、相対的に、このような経験をするのが、より少ないと評定している。

「(5)自分はのけ者にされていると感じること」についても、学級規模1の児童が、学級規模4を除いた他の三つの学級規模の児童より、相対的に、このような経験をするのが、より少ないと評定している。

「(2)友だちのせいで授業に集中できないこと」「(9)授業や話し合いなどが始まるまでに時間がかかりすぎると感じること」「(10)授業や話し合いの時、さわりだり、立ち歩く友だちがいること」の3項目については、概して、学級規模1あるいは学級規模2の児童が、他の三つの学級規模(3, 4, 5)の児童より、相対的に、このような経験をするのが、より少ないと評定している。

「(7)自分のクラスはまとまっていると感じること」については、学級規模4の児童が、他の三つの学級規模(1, 2, 3)の児童より、相対的に、このような経験をするのが、より少ないと評定している。

概して、小規模学級(特に学級規模1)の児童は、どちらかと言えば、ネガティブな表現項目(項目(1)(5)(8)(10)(11)など)について、他の四つの学級規模の児童より、相対的に、その経験がより少ないと評定する傾向にある。学級児童数20人を境にして、学級内の児童の意識・態度が、やや異なる傾向がみられる。

7-2-2 中学生の結果と考察

分析に用いた11項目のうち2項目((1)答えがわからなくて恥ずかしい思いをすること、(6)クラスの友だちは、成績やテストのことばかり気にすると感じる)では、いずれの学級規模間の平均値に、統計的な有意差は認められなかった。全体の平均値から項目(1)項目(6)ともに、「あまりない」に近い評定しているという結果がみられる。

その他の項目については、以下に述べるように学級規模間の平均値に統計的な有意差が認められるものの、全体的な傾向としては項目「(5)自分のはけ者にされていると感じること」と「(8)友だちどうしの争いやいじめをみること」の2項目については、「あまりない」に近い評定をし、「(4)友だちが困っているとき、誰かが助けになってあげること」、「(9)授業や話し合いなどが始まるまでに時間がかかりすぎると感じること」、「(10)授業や話し合いの時、さわりだり、立ち歩く友だちがいること」の3項目では、評定値の中間値(2.50)と「時々ある」の範囲で、その他の5項目については、評定値の中間値(2.50)と「あまりない」の範囲で評定している。中学生も小学生の場合とほぼ同様に、学級内での意識・態度として概ね良好な状態がみられる。

なお、学級規模間の平均値の差の検定結果から、特徴的な傾向をあげると以下ようになる。

「(3)友だちがまちがえた時、笑ったり、ひやかしたりすること」について、学級規模1の生徒が、他の四つの学級規模(2, 3, 4, 5)の生徒より、相対的に、このような経験をするのが、より少ないと評定している。

「(2)友だちのせいで授業に集中できなかったこと」と「(8)友だちどうしの争いやいじめをみること」の2項目については、学級規模1と学級規模2の間及びこれらの学級規模(1, 2)とその他の三つの学級規模(3, 4, 5)間に平均値の差が認められる。規模が小さい学級の生徒ほど、相対的に、このような経験をするのが、より少ないと評定している傾向にある。

「(9)授業や話し合いなどが始まるまでに時間がかかりすぎると感じること」と「(10)授業や話し合いの時、さわりだり、立ち歩く友だちがいること」と「(11)クラスを変わりたいと思うこと」の3項目については、学級規模1と学級規模2の間及びこれらの学級規模(1, 2)とその他の三つの学級規模(3, 4, 5)のいくつかと平均値の差が認められる。規模が小さい学級の生徒ほど、相対的に、このような経験をするのが、より少ないと評定している傾向にある。

「(5)自分のはけ者にされていると感じること」については、学級規模1の生徒が、学級規模2, 3の生徒より、相対的に、このような経験をするのが、より少ないと評定している。

「(4)友だちが困っているとき、誰かが助けになってあげること」と「(7)自分のクラスはまとまっていると感じること」の2項目については、概して、規模の小さい学級の生徒ほど、相対的に、このような経験をするのが、より多いと評定している。

小学生の場合と比較して、学級規模1と2の間に平均値の差が認められる項目がやや多く、学級規模3, 4, 5間では、小学生の場合と同様、平均値に差が認められない項目が多い。このことから、生徒数が20人以下、21~25人、26人以上の三つ場合で、生徒の学級内での

表 7 - 2 - 1 学級内での児童の意識・態度（小学生）

項 目 \ 学級規模	1	2	3	4	5	全体	平均値の差 の検定*
(1) 答えがわからなくて恥ずかしい思いをすること	2.79	2.69	2.69	2.67	2.71	2.71	1>(2・3・4・5)
(2) 友だちのせいで授業に集中できないこと	2.68	2.70	2.52	2.57	2.52	2.61	(2・1)>(3・5)
(3) 友だちがまちがえた時、笑ったり、ひやかしたりすること	3.02	2.94	2.99	2.99	3.00	2.99	ns
(4) 友だちが困っているとき、誰かが助けになってあげること	2.05	2.12	2.06	2.17	2.12	2.10	ns
(5) 自分はのけ者にされていると感じること	3.16	3.02	3.03	3.08	3.03	3.07	1>(2・3・5)
(6) クラスの友だちは、成績やテストのことばかり気にすると感じる	2.85	2.70	2.64	2.69	2.66	2.72	1>(2・3・4・5)
(7) 自分のクラスはまとまっていると感じること	2.52	2.57	2.57	2.73	2.68	2.60	4>(1・2・3)
(8) 友だちどうしの争いやいじめをみる	2.85	2.66	2.64	2.55	2.62	2.68	1>(2・3・4・5)
(9) 授業や話し合いなどが始まるまでに時間がかかりすぎると感じる	2.42	2.37	2.30	2.27	2.22	2.33	1>(4・5) 2>5
(10) 授業や話し合いの時、さわいんだり、立ち歩く友だちがいる	2.63	2.55	2.35	2.39	2.19	2.45	1>(3・4・5) 2>5
(11) クラスを変えたいと思う	3.33	3.02	3.02	2.94	2.96	3.08	1>(2・3・4・5)
学級数	76	71	52	55	45	299	

* 五つの学級規模すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値の差を検討した。
 nsは、すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す（ $p>0.05$ ）。
 その他は、いくつかの二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差があったことを示す（ $p<0.05$ ）。例 5>2（5・4）、（2・3・4・5）等は、それらの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す（ $p>0.05$ ）。
 平均値は、数値が小さいほど表記の項目に賛同（よくある）、大きいほど反意（全くない）の方向に評定をしている。

表 7 - 2 - 2 学級内での児童の意識・態度（中学生）

項 目 \ 学級規模	1	2	3	4	5	全体	平均値の差 の検定*
(1) 答えがわからなくて恥ずかしい思いをすること	2.75	2.71	2.71	2.75	2.70	2.72	ns
(2) 友だちのせいで授業に集中できないこと	2.80	2.66	2.53	2.50	2.48	2.61	1>2>(3・4・5)
(3) 友だちがまちがえた時、笑ったり、ひやかしたりすること	2.86	2.73	2.63	2.69	2.67	2.72	1>(2・3・4・5)
(4) 友だちが困っているとき、誰かが助けになってあげること	2.06	2.03	2.17	2.13	2.20	2.11	5>(1・2) 3>2
(5) 自分はのけ者にされていると感じること	3.25	3.16	3.14	3.18	3.18	3.18	1>(2・3)
(6) クラスの友だちは、成績やテストのことばかり気にすると感じる	2.74	2.65	2.71	2.64	2.72	2.70	ns
(7) 自分のクラスはまとまっていると感じること	2.37	2.51	2.56	2.49	2.52	2.48	3>2>1 5>1
(8) 友だちどうしの争いやいじめをみる	3.31	3.10	2.92	2.93	2.94	3.06	1>2>(3・4・5)
(9) 授業や話し合いなどが始まるまでに時間がかかりすぎると感じる	2.47	2.29	2.22	2.23	2.13	2.28	1>2>5 1>3 1>4
(10) 授業や話し合いの時、さわいんだり、立ち歩く友だちがいる	2.57	2.36	2.16	2.18	2.09	2.29	1>2>(3・5) 1>4
(11) クラスを変えたいと思う	3.17	2.91	2.77	2.76	2.72	2.89	1>(3・4・5) 1>2 2>5
学級数	70	66	54	50	58	298	

* 五つの学級規模すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値の差を検討した。
 nsは、すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す（ $p>0.05$ ）。
 その他は、いくつかの二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差があったことを示す（ $p<0.05$ ）。例 5>2（5・4）、（2・3・4・5）等は、それらの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す（ $p>0.05$ ）。
 平均値は、数値が小さいほど表記の項目に賛同（よくある）、大きいほど反意（全くない）の方向に評定をしている。

意識・態度が、それぞれ少しずつ異なっていることが示唆される。

小学生の場合と同様、どちらかと言えば、ネガティブな表現項目（項目（2）（3）（8）（9）（10）（11））では、小規模学級の生徒ほど、相対的に、その経験がやや少ないと評定している。また、ポジティブな表現項目（項目（4）（7））では、小規模学級の生徒ほど、相対的に、その経験がやや多いと評定している。

7 - 3 教師の児童・生徒理解

児童・生徒からみた、教師の児童・生徒理解について、『日ごろ、担任の先生について感じていること、思っていることについて、つぎのようなことがどのくらいありましたか。それぞれ、「よくあった、時々あった、あまりなかった、全くなかった」の中から一つだけ選んで、当てはまるところにをつけてください。』の指示により、表7 - 3 - 1、表7 - 3 - 2に示した8項目について評定を求めた。選択肢の「よくあった」に1、「時々あった」に2、「あまりなかった」に3、「全くなかった」に4の数値を与え、学級規模別の学級の平均値を算出し、その結果を表7 - 3 - 1（小学生）、表7 - 3 - 2（中学生）に示した（従って、平均値の値が小さい程、表の項目に同意（よくあった）、大きい程、反意（全くなかった）の方向に評定をしていることになる）。表中には、五つの学級規模のすべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値の差を検定結果も示してある。

7 - 3 - 1 小学生の結果と考察

分析に用いた8項目のうち4項目（（4）先生は、気軽に話を聞いたり、相談にのってくれと感じたこと、（5）先生は、私たちの考えていることやしていることをよく理解していると感じたこと、（6）先生は、私たちのことを心配してくれていると感じたこと（7）先生の考えていること、言われることがわからないと感じたこと）では、いずれの学級規模間の平均値に、統計的な有意差は認められなかった。全体の平均値から、項目（4）（5）（6）については、「時々あった」の方向に、項目（7）については「あまりなかった」の方向に評定をしているという結果がみられる。

その他の項目については、以下に述べるように学級規模間の平均値に統計的な有意差が認められるものの、全体的な傾向としては項目「（2）先生は、私の家庭の状況をよく知っていると思ったこと」は「あまりなかった」に近い評定、その他の3項目については、評定値の中間値（2.50）と「時々あった」の範囲で評定している。

小学生は、概ね、教師が自分たちを理解してくれていると評定しているといえよう。

学級規模間の平均値の差の検定結果から、特徴的な傾向をあげると以下ようになる。

「（3）先生は、私が勉強でつまづいたり、わからないことをよく知っていると思ったこと」と「（8）先生は、みんなを公平にあつかっていると思ったこと」の2項目については、学級規模4、5の児童より、学級規模1の児童の方が、相対的に、このような経験をしたことが、やや多いと評定している。

「（1）先生は、私のことをよく知っていると思ったこと」については、学級規模5の児童より、学級規模2の児童の方が、「（2）先生は、私の家庭の状況をよく知っていると思ったこと」については、学級規模4の児童より、学級規模1の児童の方が、相対的に、このような経験をしたことが、やや多いと評定している。

表 7 - 3 - 1 教師の児童理解（小学生）

項 目 \ 学級規模	1	2	3	4	5	全体	平均値の差の検定*
(1) 先生は、私のことをよく知っていると思ったこと	2.40	2.35	2.38	2.46	2.50	2.41	5>2
(2) 先生は、私の家庭の状況をよく知っていると思ったこと	2.84	2.89	2.92	3.00	2.96	2.91	4>1
(3) 先生は、私が勉強でつまづいたり、わからないことをよく知っていると思ったこと	2.38	2.48	2.46	2.54	2.57	2.48	(5・4)>1
(4) 先生は、気軽に話を聞いたり、相談に乗ってくれると感じたこと	2.24	2.24	2.23	2.37	2.38	2.28	ns
(5) 先生は、私たちの考えていることやしていることをよく理解してくれていると感じたこと	2.21	2.19	2.16	2.28	2.32	2.22	ns
(6) 先生は、私たちのことを心配してくれていると感じたこと	2.07	2.05	2.07	2.13	2.16	2.09	ns
(7) 先生の考えていること、言われることがわからないと感じたこと	2.70	2.73	2.68	2.69	2.73	2.71	ns
(8) 先生は、みんなを公平にあつかっていると思ったこと	2.10	2.15	2.17	2.27	2.32	2.19	(5・4)>1
学級数	76	72	52	55	45	300	

* 五つの学級規模すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値の差を検討した。
 nsは、すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す（ $p>0.05$ ）。
 その他は、いくつかの二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差のあったことを示す（ $p<0.05$ ）。例 5>2（5・4）、（2・3・4・5）等は、それらの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す（ $p>0.05$ ）。
 平均値は、数値が小さいほど表記の項目に賛同（よくある）、大きいほど反意（全くない）の方向に評定をしている。

表 7 - 3 - 2 教師の児童理解（中学生）

項 目 \ 学級規模	1	2	3	4	5	全体	平均値の差の検定*
(1) 先生は、私のことをよく知っていると思ったこと	2.45	2.63	2.75	2.67	2.65	2.62	(2・3・4・5)>1
(2) 先生は、私の家庭の状況をよく知っていると思ったこと	2.86	2.99	3.09	3.05	3.06	3.00	(2・3・4・5)>1
(3) 先生は、私が勉強でつまづいたり、わからないことをよく知っていると思ったこと	2.41	2.63	2.73	2.67	2.73	2.62	(2・3・4・5)>1
(4) 先生は、気軽に話を聞いたり、相談に乗ってくれると感じたこと	2.31	2.50	2.60	2.54	2.56	2.49	(2・3・4・5)>1
(5) 先生は、私たちの考えていることやしていることをよく理解してくれていると感じたこと	2.34	2.49	2.67	2.51	2.58	2.51	3>(2・4・5)>1
(6) 先生は、私たちのことを心配してくれていると感じたこと	1.99	2.18	2.25	2.22	2.21	2.16	(2・3・4・5)>1
(7) 先生の考えていること、言われることがわからないと感じたこと	2.45	2.46	2.38	2.47	2.45	2.44	ns
(8) 先生は、みんなを公平にあつかっていると思ったこと	2.09	2.29	2.44	2.27	2.34	2.28	3>2>1 (4・5)>1 3>4
学級数	71	66	54	50	58	299	

* 五つの学級規模すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値の差を検討した。
 nsは、すべての二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す（ $p>0.05$ ）。
 その他は、いくつかの二つの組み合わせの学級規模間の平均値に有意な差のあったことを示す（ $p<0.05$ ）。例 5>2（5・4）、（2・3・4・5）等は、それらの学級規模間の平均値に有意な差がなかったことを示す（ $p>0.05$ ）。
 平均値は、数値が小さいほど表記の項目に賛同（よくある）、大きいほど反意（全くない）の方向に評定をしている。

7 - 3 - 2 中学生の結果と考察

分析に用いた8項目のうち1項目「(7)先生の考えていること、言われることがわからないと感じたこと」のみ、いずれの学級規模間の平均値に、統計的な有意差は認められなかった。項目(7)の平均値は、いずれの学級規模においても評定値のほぼ中間値(2.50)に集中している。

その他の項目については、以下に述べるように学級規模間の平均値に統計的な有意差が認められるものの、全体的な傾向としては項目「(2)先生は、私の家庭の状況をよく知っていると思ったこと」は「あまりなかった」に近い評定をし、項目(4)(5)(7)は、評定値のほぼ中間値(2.50)前後、項目(1)(3)は、評定値の中間値(2.50)と「あまりなかった」の範囲、項目(6)(8)は評定値の中間値(2.50)と「時々あった」の範囲で評定している。

したがって、小学生ほどではないにせよ、中学生も概ね、教師が自分たちを理解してくれていると評定している。

学級規模間の平均値の差の検定結果から、特徴的な傾向をあげると以下ようになる。

「(1)先生は、私のことをよく知っていると思ったこと」, 「(2)先生は、私の家庭の状況をよく知っていると思ったこと」, 「(3)先生は、私が勉強でつまづいたり、わからないことをよく知っていると思ったこと」, 「(4)先生は、気軽に話を聞いたり、相談にのってくれると感じたこと」, 「(6)先生は、私たちのことを心配してくれていると感じたこと」の5項目については、学級規模(2, 3, 4, 5)の生徒より、学級規模1の生徒の方が、相対的に、これらの経験をしたことが、やや多いと評定している。

「(5)先生は、私たちの考えていることやしていることをよく理解していると感じたこと」と「(8)先生は、みんなを公平にあつかっていると思ったこと」の2項目は、学級規模1、学級規模(2, 4, 5)、学級規模3の順に、生徒は、これらの経験をしたことが、相対的に、やや多いと評定している。

概して、学級規模1の生徒は、他の学級規模(2, 3, 4, 5)の生徒より、教師は自分たちの理解してくれていると感ずる経験が、相対的に、やや多い方向に評定している。また、学級規模2, 3, 4, 5の生徒の教師の生徒理解の評定は、ほぼ同程度であると言えよう。

7 - 4 適正な「生活集団」の規模

『あなたは、クラスで、友だちと話したり、給食や学級活動などの時間を過ごしたりするとき、今のクラスの人数についてどんな印象をもっていますか。つぎの五つの中から一つだけ選んで、その番号を でかこんでください。』の指示により、児童・生徒の現在の「生活集団」の規模(人数)について、次の五つの選択肢「1. もっと少ない方がよい 2. もう少し少ない方がよい 3. ちょうどよい 4. もう少し多い方がよい 5. もっと多い方がよい」で評定を求め、各選択肢の回答率を表7 - 4 - 1(小学生)、表7 - 4 - 2(中学生)に示した。

7 - 4 - 1 小学生の結果と考察

いずれの学級規模においても、「ちょうどよい」の回答率が最も高く、52%~59%の範囲にある。「もう少し多い方がよい」の回答率は、学級規模1が、最も高く32%で、学級規模が大きくなるにつれて、この回答率は低くなり、学級規模5では、14%となっている。また、「もっと多い方がよい」の回答率は、いずれの学級規模でもほぼ同じ程度で、8%~11%の範囲にある。

一方、「もう少し少ない方がよい」の回答率は、学級規模 5 が最も高く17%で、学級規模が小さくなるにつれて、この回答率は低くなり、学級規模 1 では4 %である。また、「もっと少ない方がよい」の回答率は、学級規模間の差は小さく、ほぼ5 %未満である（学級規模と選択肢の回答率に統計的に有意差が認められた（ $\chi^2 = 310.56$ df=12 $p < 0.01$ ））。

7 - 4 - 2 中学生の結果と考察

中学生の場合も、小学生の場合と同様に、いずれの学級規模においても、「ちょうどよい」の回答率が最も高く、48%～62%の範囲にある。

「もう少し多い方がよい」の回答率は、学級規模 1 が最も高く31%で、学級規模が大きくなるにつれて、この回答率は低くなり、学級規模 5 では7 %となっている。また、「もっと多い方がよい」の回答率も学級規模が大きくなるにつれて低くなり、学級規模 1 では16%であるのに対して、学級規模 5 では5 %である。

一方、「もう少し少ない方がよい」の回答率は、学級規模 5 が最も高く22%で、学級規模が小さくなるにつれて、この回答率は低くなり、学級規模 1 では2%である。また、「もっと少ない方がよい」の回答率も学級規模が小さくなるにつれて低くなり、学級規模 1 では11%であるのに対して、学級規模 5 では3 %である。

いずれの学級規模でも「ちょうどよい」の回答率が最も高く、次いで学級規模 1 , 2 , 3 では、多い方がよい（もっと / もう少し）、学級規模 4 , 5 とでは、少ない方がよい（もっと / もう少し）の回答率となっている（学級規模と選択肢の回答率に統計的に有意差が認められた（ $\chi^2 = 835.01$ df=12 $p < 0.01$ ））。

以上の小学生、中学生の調査結果は、第1章第3節で述べた、適正な「学習集団」の規模に関する調査結果と同様の傾向を示しており、児童・生徒は、「学習集団」と「生活集団」の規模（人数）を区別して考えていないことが推察される。

表 7 - 4 - 1 適正な「生活集団」の規模（小学生）

学級規模 選 択 肢	1	2	3	4	5	全体
1. もっと少ない方がよい	1.8	2.3	2.6	4.7	5.1	3.5
2. もう少し少ない方がよい	3.9	6.9	8.6	13.6	17.0	10.6
3. ちょうどよい	52.2	57.4	58.9	56.6	56.1	56.5
4. もう少し多い方がよい	31.5	23.7	21.9	16.8	14.0	20.7
5. もっと多い方がよい	10.7	9.6	7.9	8.4	7.9	8.8
	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)
対象者数	1,020	1,605	1,400	1,759	1,638	7,422

表 7 - 4 - 2 適正な「生活集団」の規模（中学生）

学級規模 選 択 肢	1	2	3	4	5	全体
1. もっと少ない方がよい	2.5	3.8	5.0	7.2	10.9	6.6
2. もう少し少ない方がよい	2.4	5.3	8.3	14.5	22.0	12.2
3. ちょうどよい	47.5	56.7	62.2	62.4	55.4	57.7
4. もう少し多い方がよい	31.4	23.4	16.2	11.1	7.1	15.6
5. もっと多い方がよい	16.3	10.9	8.2	4.8	4.7	7.9
	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)
対象者数	762	1,413	1,408	1,525	1,989	7,097

7 - 5 「学習集団」と「生活集団」の分離に対する意見

伝統的に、学校では、同じ学級で教科の指導を受けたり、給食や学級活動などを行ってきたが、今後は「学級」という概念を機能的に分化させ、教科指導を行う場合(学習集団)とそれ以外の活動(生活集団)を行う場合とで、集団編成のあり方を分けて考えていこうという提案がなされている(「教職員配置のあり方等に関する調査研究協力者会議」平成12年5月)。

このような提案について、児童・生徒に「1. やってみるとおもしろそうだ」「2. よいかどうか、やってみないとわからない」「3. なかなかイメージがわからない」「4. 今のままがよい」の4選択肢で評定を求めた。各選択肢の回答率を表7-5-1(小学生)、2(中学生)に示した。

7 - 5 - 1 小学生の結果と考察

小学生の回答率が最も高いのは、「今のままがよい」で、学級規模1が47%、その他の学級規模(2, 3, 4, 5)では40%前後である。次いで、「よいかどうか、やってみないとわからない」で、24~29%の範囲で、「やってみるとおもしろそうだ」が16~22%の範囲である。最も回答率が低いのは、「なかなかイメージがわからない」で、11~13%の範囲である。

なお、学級規模と選択肢の回答率に統計的に有意差が認められた($\chi^2=39.20$ df=12 $p<0.01$)。

学級規模1の「今のままがよい」の回答率が他の四つの学級規模(2, 3, 4, 5)より、また、学級規模4の「やってみるとおもしろそうだ」の回答率が学級規模1, 2, 3の回答率より、やや高いことが、統計的に有意差を生じさせたのではないかと推察される。

表7-5-1 「学習集団」と「生活集団」の分離に対する意見(小学生)

学級規模 選 択 肢	1	2	3	4	5	全体
1. やってみるとおもしろそうだ	16.1	17.6	17.5	22.1	19.3	18.8
2. よいかどうか、やってみないとわからない	24.4	29.3	28.0	27.0	28.9	27.7
3. なかなかイメージがわからない	12.5	13.0	13.4	10.9	12.5	12.4
4. 今のままがよい	47.0	40.1	41.1	40.0	39.3	41.0
	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)
対象者数	1,020	1,605	1,398	1,758	1,637	7,418

表7-5-2 「学習集団」と「生活集団」の分離に対する意見(中学生)

学級規模 選 択 肢	1	2	3	4	5	全体
1. やってみるとおもしろそうだ	23.5	25.9	27.3	27.8	28.9	27.2
2. よいかどうか、やってみないとわからない	28.7	29.8	31.5	30.4	32.3	30.8
3. なかなかイメージがわからない	18.7	17.0	17.0	15.6	16.0	16.6
4. 今のままがよい	29.0	27.2	24.1	26.2	22.8	25.3
	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)
対象者数	790	1,446	1,441	1,552	2,033	7,262

7 - 5 - 2 中学生の結果と考察

中学生の回答率が最も高いのは、小学生の結果とは異なり、「よいかどうか、やってみないとわからない」で、いずれの学級規模ともに約30%である。次いで、「やってみるとおもしろそうだ」が24%~29%の範囲、「今のままがよい」が23%~29%の範囲にある。最も回答率が低いのは、小

学生の場合と同様、「なかなかイメージがわからない」で、16%～19%の範囲という結果である。

中学生の場合は、学級規模と選択肢の回答率に統計的に有意差が認められなかった ($\chi^2=26.985$ df=12 $p > 0.05$)。